日本史

河合塾講師による

問題分析＆学習アドバイス

2014年度入試の問題分析

❶入試の概要

解答形式は、記述式・マーク式の２形式。分量は、一般入試 前期Ａ日程＜1/27＞・＜1/28＞ともに大問４、小問44(記述式12問・マーク式32問)で、前年度と分量はほぼ変わらなかった(前年度は小問43～小問44)。

問題形式は、テーマ性をもった問題文などを前提に、空欄補充や空欄組合せ、用語４択・文章４択などの設問を配置するものが多い。本年度は、前年度に出題されなかった史料を用いた問題や、３文章の年代整序問題が復活した。

また、前々年度・前年度出題のなかった文化作品の図版を用いた問題が本年度は出題された。

全日程を通じた時代・分野の比率を見ると、時代では近代から35％程度、近世・中世から30％程度、古代から10％程度出題された。なお、本年度は原始・戦後からの出題はなかった。分野では、文化から30％程度、政治・経済・外交から20％程度が出題された。ただし、本学ではテーマ史の形式をとることが多いので、日程によって時代・分野の配分に偏りがある。

❷出題傾向と難易

本学では大問ごとに特定のテーマが設定され、それに基づいて出題される傾向が強い。各時代の政治史を軸に、近世・近代の文化史、近世～戦後の外交史、近世～戦後の経済・産業史などが頻出のテーマで、視点を変えて繰り返し出題される傾向にある。なお、時代では近世・近現代、分野では政治・社会経済からの出題が比較的多いのが、ここ数年の傾向である。

問題のレベルは、記述式・マーク式ともに一部を除いて標準的である。記述式では基本用語を正確に書けるかどうかで、マーク式では多くの受験生が苦手とする文章４択問題を確実に正解できるかどうかで得点差がつく。文章４択問題の誤りの箇所は基本知識で判断できるものが多く、やや詳細な知識を必要とする場合にも、消去法などを用いることで対応が可能である。なお本年度は、前年度に出題がなかった史料４択問題や３文章の年代整序問題、文化作品の図版を用いた問題など、受験生に「考えさせる」問題が出題された。このような問題に対処できたかどうかがで差がついただろう。

学習アドバイス

①教科書の学習が基本

本学では、基本的な歴史事項を問う問題が多いが、文章４択問題など用語の丸暗記だけでは対処できない問題も少なからず出題される。したがって、教科書の内容をしっかりと理解しながら、基本用語を覚えていく学習が大切である。その際、文章４択問題や年代感覚を試す問題への対策として、歴史用語を見て、それがいつ頃(何世紀・何時代)の、どのような内容のものなのかを説明できるようになっておきたい。

時代・分野の出題比率は日程ごとに異なるが、全日程を総合するとほぼまんべんなく出題されている。よって全時代・全分野を射程に入れて学習し、苦手な時代・分野を残さないようにすることが大切である。本年度は出題がなかったものの、戦後史については、例年10％前後の出題が見られるので、高度成長期までを中心に確実に学習しておきたい。

②記述問題対策はしっかりと

本学では、記述式問題が得点源である。問われる事項は基本的な用語がほとんどなので、正確に漢字が書けるかどうかで得点差がひらく可能性がある。日頃から、歴史用語を正確に書いて覚える学習を心がけたい。

③形式・傾向に慣れるため過去問を解く

本学では、2006年度に出題された岩崎弥太郎の三菱汽船会社に関する知識が2009・2010年度入試で再び問われたり、2009年度に問われた筑豊炭田が2011年度に再び出題されたり、2012年度・2013年度で連続して農山漁村経済更正運動が問われたり、と同一のテーマや用語が繰り返し出題される傾向にある。したがって、市販の基本的な問題集を一冊仕上げた上で、本学の入試問題を複数年分解き、問われている用語以外の選択肢や関連事項も含めて復習することで、本学頻出のテーマや用語についての理解を深めておくと非常に効果的である。

④史料や図版・絵画なども見ておく

本学では史料や図版・絵画などを使用した問題がたびたび出題されている。教科書掲載の図版・史料などにもしっかりと目を通して、その内容を理解しておきたい。